kai

ISSN 0911-5587

楷

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 32

2001
FEBRUARY

調べる、読む、発信・受信する、ゆとりの空間、……

岩見基弘

いきなり片仮名で失礼します．近年、グローバリゼーション、ユニバーサル化ということがよく言われます．後者については、M.トロウ（及び、喜多村和之等）は、大学への進学率が18歳人口の15％以下、15～50％、50％以上と変化するに従い、エリート、マス、ユニバーサル型と変化するという定義をしています．また、ユニバーサル化には、遠隔学習、生涯学習なども含めて考える必要があります．それをとりまく環境として、情報技術（IT）の進歩に基づくグローバル化があります．本学附属図書館の将来像を考えるとき、このような境界条件を無視することはできないでしょう．

ユニバーサル化の一面である、18歳人口の50％近くが大学に進学してくることから、館内での携帯電話使用など様々な問題が生じています．また、ユニバーサル・アクセスやグローバル化の観点からも大学附属図書館への多様な要求・期待があります．

そこで、昨年秋に、「21世紀における附属図書館の在り方」について、図書館職員の皆さんに提案を求めました．それをまとめ、若干私見も加えながら、本学附属図書館の将来像を考えてみたいと思います．

図書館の機能を考えるとき、

1）書籍・雑誌・貴重資料などの収集・保存と利用提供の機能

2）電子図書館機能

3）「ゆとりの空間」としての機能

が上げられるでしょう．これらの機能を充実・発展させる上で、

4）組織改革

を考えるべきときにきています．

まず、第一の機能については、古い（学習用図書）、少ない（書籍・雑誌）という問題があります．現在、本学の教育開発センターでは、厳格な成績評価、履修登録科目の上限設定などに取り組み、学生さんによく学習してもらい、卒業（修了）後、国際社会に通用する人材の育成を目指しています．また、研究面でも、先端的な研究成果を上げることを「21世紀の岡山大学構想」に上げています．これを実現するためには、書籍・雑誌などの充実とその利用のための環境整備が、図書館にとって基本的かつ不可欠の要素です．

また、池田家文庫などの貴重資料を保存し利用に供していることは、本学附属図書館の大きな特徴です．この資料の修復と電子化を、本学の学長裁量経費と文部省の科学研究費補助金の援助で進めてきています．しかし、12年度は、科学研究費補助金の申請が採択されないなど、その完成には、一層の工夫が必要です．

電子図書館については、様々な形での設置が、既にいくつかの大学で実現しています．しかし、この二年ばかり、新規の概算要求は認められていません．本学附属図書館からの概算要求が認められない中でも、電子化は避けて通れない課題です．既に、本誌にも、中央館の北條係長が、オーストラリア研修の報告の中で指摘していますが、北條係長の訪問した大学では、本学に比べれば、はるかに多数の電子情報にアクセスできるようになっています．このように、グローバル化の中で、本学は、大きな遅れをとっており、国際競争力の強化の点からも憂うべき事態です．

電子化については、図書館だけの問題ではなく、「情報メディアセンター」のような形で、大学全体として総合的に取り組むべき課題でしょう．附属図書館長（平成12年４月より広報委員長も担当）としても、センター設置の重要性を提起し、本学の第１常置（総務）委員会の中に設けられた「IT構想専門家会議」でも議論し、概算要求を含めて、その実現のための検討がなされています．なお、図書館独自には、電子図書館研究開発室を設置し、検討を進めるとともに、図書資料のパソコン端末からの検索を可能にする遡及入力（学長裁量経費による）、紀要等の電子情報としての提供などに取り組んでいます．

「ゆとりの空間」としての附属図書館の役割も重要です．書架の間を散策しながら、思索にふける、くつろいだ時間を過ごせる、そのような図書館にしたいものです．そのためには、講演会や映写会などの企画も必要でしょう．

生涯学習・地域共同などの観点からは、地域の大学や市民の利用にも、さらに便宜をはかる必要があります．そのためにも、電子化が力を発揮するでしょう．既に、例えば、池田家文庫などの貴重資料の一部を電子化し、利用に供しているところです．

また、学内外の利用者にとって、親切であり、信頼される図書館であることを目指す必要があります．

以上のようなことを実現していくためには、図書館職員の意識改革と組織改革が必要で

す．昨年、本学附属図書館には、運営委員会の下に「将来構想検討小委員会」を設け、将来構想の検討と点検・評価を一段と進めることにしました．本学附属図書館は、専任は事務系職員のみですが、教員と職員が協力し、できれば学生、市民の方々にも加わっていただいて、充実した、利用しやすい図書館へと発展させたいものです．

岡山大学の構成員の皆さんのご支援をお願いします．

（いわみ・もとひろ　附属図書館長）

附属図書館の将来構想について

石　田　常　亞

1．はじめに

本学でも、新たに附属図書館運営委員会のもとに、図書館将来構想検討小委員会を設置（設置申合せ第1）した．その目的として、附属図書館に係る将来構想の検討、及び自己点検評価を行う（同第2）こととしている．

中央では国立大学の独立行政法人化へ向けての検討が進められている．それに先だって、大学への予算配分の改善策が平成12年度からスタートし、本学でも財務を担当する第6常置委員会で検討に着手し、平成13年度の学内配分方針がそろそろ固まりそうである．このように国立大学の運営環境が変革期に入る中、附属図書館の将来構想、生き残り策を検討するために、この検討小委員会を立ち上げた．

全学的には既に昨年発表された「21世紀の岡山大学構想」に基づき、先の常置委員会を含め7つの委員会が活動を開始している．その構想の中で、「21世紀に向けての基盤整備(1)学術情報基盤の整備の2）」で大学図書館の整備について記述されている．

当館における検討作業はこれからであるが、その中味に盛り込まれるであろうキーワードについて、若干述べてみたものである．

2．図書資料の収集、及び保存

図書館に限らず組織運営の要素として、「ひと・もの・かね」 の三つがいわれ、図書館のような場合は、「入れ物」も入ってくる．現在まで入れ物の中に何が入っているのか、今後も同様な物が入り続けるのか、入れ物の将来はどうするのかといった問題がある．大学の役割は、教育、研究に加えて、知識・文化の伝承、社会貢献が挙げられる．大学内には博物館とか美術館も整備されようとしているが、やはり大学創設と同時に設置されている大学図書館が、他の施設に比しても大きな役割を果たしていることはいうまでもない．

2－1．電子的資料の充実

図書館の機能にも、従来型の伝統的図書館に機械化が加味され、更に電子図書館的機能を具備することが求められている．一般社会の中に電子的資料が爆発的に増大し、その利活用に工夫・知恵を出し合うことで苦慮せざるを得ない時代となっている．自然科学系外国雑誌の価格高騰は電子ジャーナルへも受け継がれ、打開策として共同利用のためのコンソーシアムが、一部地域で立ち上がっている．日本では一地域だけでコンソーシアムを導入するには前途多難な面がある．何れは国内統一レベルで対応しないと、その財源確保について一大学だけでその導入拡大を検討するのはなかなかしんどいことであり、まずは既に立ち上がっているシステムへ参加することから始めるのが賢明な策であろう．一方では単行書類のCD-ROM化されたもの、国会図書館によりネットワークサービスを開始しているもの、「青空文庫」といった電子ブックの導入も検討に値する．いわゆる利用寿命のながい人文・社会科学系文献が中心であり、収集の対象としては資料・史料類は十分考えられるが、逆に個人コレクションの構築を目指したものではないだろうか．これら電子的資料の収集については「3．電子図書館の整備･充実」でふれることにする．

2－2．地域保存

大学の規模にもよるが、総合大学図書館としての蔵書構成のありかた、収書方針を策定しておくことが非常に大切なこととなってくる．生涯学習社会への貢献の一策として、学内施設開放の一環でもある図書館の一般公開は､従来からも可能なことから導入している．しかし大学図書館としての蔵書構成、収書方針を確立したうえで、そのサービス役割を果たすわけで、近くに類縁機関がないため、その役目も果たすことが要請されるかもしれないが代替機関である必要はなく、関係機関との連携協力を緊密にすることによって貢献できるわけである．

2－3．保存施設

文化財産として収集された図書資料を保存、修復することも大事なこととなってくる．大学図書館には学内教官により研究教育のために収集されたもの、あるいは篤志家により寄贈されたものが、中には複数本も多数あり、全蔵書を後世まで保存できるものではない．資料の寿命、劣化、破損など多方面から、保存すべき資料群の選別方針も必要となってくる．入れ物に限度があるからだ．保存すべき資料が選定されても、保存場所に問題が生じてきたら、場所作り、場所探しが必要となってくる．現在では相互交換、寄贈などでしのいでいるが、新たに保存図書館（トランクルームではない）構想を模索している大学があらわれだした．一大学レベル、地域レベル、国レベルのものなど以外に、公共図書館などとの地域での連携が可能にならないだろうか．もちろん、規制緩和などが前提となってくる．岡山県でも新県立図書館の建築がスタートし、その保存対策もたてられているが、分担保存可能なものから再度検討すべきと思われ、例えば郷土資料などでは、電子化の共同作業なども考えてみたいものである．蔵書量の増大を誇っている時代ではなく、各館が独自性を持った個性あるコレクションの構築が、真の文化遺産を後世にのこすべき策と思われる．岡山大学では永年の夢であった新・増築中央図書館ができ上がり、伝統型図書館よりの脱皮へ向けて更なる夢を模索している．

2―4．鹿田分館の増改築

次なる夢として、鹿田地区における新医学図書館構想を立ち上げてみたい．キャンパス移転という構想はなく、むしろ生命科学系大学院の拠点としての再開発がスタートしている．再開発後の医学・医療情報センターの役割を担うシステム作りが必要となってくる．例えば、閲覧席の拡充や情報関連コーナーの整備充実などの研究・学習環境の整備、各講座研究室所蔵バックナンバーの集中化による共同利用の促進、地域医療サービスへも貢献できる医学・医療情報センター機能の充実などが挙げられるであろう．今後は電子的資料が他の分野に比しても爆発的に増大することが予想され、保存スペースが限りなく必要とはならないと思われる．そういう意味でも電子的資料利用環境の充実こそが最重要課題となってくる．

3．電子図書館的機能の整備·充実

まず電子図書館的機能を発揮するための環境作りが必要となってくる．学内・外からの財源確保に工夫をこらし、電子的資料の収集、既存資料、あるいは今後生産される学内学術資料の電子化、図書館資料を使った教材作りなどが考えられる．目録データベースの作成や、古文書などでは電子化された資料の検索手段の機能拡充など、学外や国外からの研究者からのアクセス可能な情報作りも必要となってくる．

電子図書館構想というものは、図書館だけで実現できるものではなく、まもなくキャンパス全体も電子化され、バーチャル・ユニバーシティー構想の中に組み込まれる時代となってくる．本学でも「IT時代における岡山大学」構想検討専門家会議も活動を開始しており、「総合メディア基盤センター（仮称）」構想の中での附属図書館の位置付けを訴えようとしている．学生に対する情報リテラシー教育の一環を図書館職員も参画しながら行ってきているが、これからは教育の情報化へ飛躍的に発展していくと思われる．

地域との連携

地域では岡山県の「岡山情報ハイウェー構想」が、また岡山市では「地域情報水道構想」が推進されている．大学側もこのような学外システムを利活用しない手はない．共同プロジェクトへも積極的に参加しながら、地域密着型の学術情報を構築していく窓口を、大学図書館が果たすことも要請されてくると思われる．情報公開法が平成13年４月から施行されようとしているが、従来の学術情報集積場所から発信場所への転換を図るうえで、クリアーしなければならない課題は山積しているが、関係者との協議を重ねながら構築していくことが望まれる．

（いしだ・つねつぐ　附属図書館事務部長）

オーストラリアの大学図書館事情（その２）

北　條　充　敏

「楷」No. 31で、オーストラリアの大学図書館事情としてキャンベラにあるCAUL（Council of Australian University Librarians）とANU Library（The Australian National University Library）の電子事情について紹介した．時間の経過は早いもので、2000年７月に視察をしてから、あっというまにシドニーオリンピック、21世紀と、半年が過ぎてしまった．前回の続きとして、「（その２）」ではThe National Library of Australia（以後、「NLA」と称す）、岡山大学と国際交流協定を結んでいるThe University of AdelaideのLibrary、先進的な電子サービスを次々と進めているクイーンズランド州のThe University of Queensland Libraryにスポットをあてて紹介する．

１．NLA

オーストラリアの図書館界にあって、最も中心的な役割にある図書館がNLAである．NLAはオーストラリアに関する生活、文化、歴史などあらゆる分野について、国内外から資料を包括的に収集している．NLAが収集した資料は、オーストラリア国民の共通財産であり、全オーストラリアの国民にできる限り公正に提供している．インターネットの出現は、都市部と地方の情報アクセスへの格差を縮小して、国土の広いオーストラリアにとって地理的条件に左右されない情報流通を可能とした．このような時代背景を反映して、NLAではインターネットを情報サービスに最大限に生かすために、①電子情報資源（データベース、インターネットリソース、電子ジャーナル）の収集提供、②図書館資料のデジタル化、③全オーストラリア総合目録システムを代表とするカタログ事業の充実など多くのデジタル事業を行っている．中でも、インターネットの参考調査への応用は非常にユニークと感じたので簡単に紹介したい．

NLAでは、電話、FAX、電子メール、Webフォーム、郵送または館内のインフォメーション・デスクなどから数多くの質問が受け付けられている．寄せられた質問は、職員によりデータベースに登録されThe Collaborative Digital Reference Service（CDRS）を通じて、最も回答に適した図書館員、図書館資料、データベース、情報資源を自動的に探し出し、インターネットを通じて質問を転送するシステムを実験していた．このシステムは、英語圏の国立図書館（Library of Congress，National Library of Canada等）と共同実験しており、2001年には実用化するとの話であった．

話は少し変わるが、館内の見学もできたので簡単に述べておく．NLAの入館には、年齢制限がない．今回訪問した時にも、親子連れの家族をたくさんみかけた．開館時間は**図１**に示すとおりで、完全な閉館はChristmas DayとGood Fridayだけには驚いた．館内には、メイン、貴重資料、地図資料、新聞とマイクロフィルム、歴史資料、手記資料、政治コレクション、アジアコレクションの閲覧室があるが、所蔵資料の99％は閉架式による提供をしていた．グランドフロアの正面奥にあるメインの閲覧室には、インターネットに接続したパソコン端末、ワープロ、スキャナー装置、バリアフリーを考慮した障害者向けの

パソコンなどがあって、来館者に開放していた．これらNLAに関する情報は、ホームページ（http://www.nla.gov.au）から見ることができる．

MAIN READING ROOM AND PETHERICK READING ROOM
Monday to Thursday　9 : 00 am － 9 : 00 pm
Friday and Saturday 9 : 00 am － 5 : 00 pm
Sunday 1 : 30 pm － 5 : 00 pm
(None: There is no stack service on Sundays)

SPECIAL READING ROOMS
Monday to Friday 9:00 am － 5:00 pm

NEWSPAPER / MICROFORM READING ROOM
Monday and Wednesday 9 : 00 am － 9:00 pm
Tuesday, Thursday, Friday and Saturday 9 : 00 am － 5 : 00 pm
The Library is closed on Christmas Day and Good Friday

図 1　HOURS OF OPENING

The National Library of Australia（NLA）

2．各州の大学図書館

今回の視察では、首都キャンベラ以外に南オーストラリア州アデレードとクイーンズランド州ブリスベンにある三つの大学図書館を訪問した．広大な国土にあって、共通した大学図書館の流れは「電子化」であった．

南オーストラリア州アデレード市中央にあるアデレード大学図書館は、蔵書約200万冊、職員は約139名を所有して、中央館、法学、芸術科学、農学、生物資源科学の各図書館からなる中規模大学である．図書館の歴史は、他の大学図書館と比較しても古く1899年まで遡ることができる．19世紀のオーストラリアで活躍した活版印刷機や手術台などの道具が数多く飾られていた．そんな歴史的な伝統をもつ図書館も、現在では大学の研究支援や教育支援の立場で考えるとき、利用者のITへのニーズにこたえるため、電子的な情報資源の収集・整理・提供の充実を図っていた．とりわけ電子ジャーナルとデータベースの確保には熱心であり、利用者はPIN（Personal Identification Number）の個人認証番号によって大学のネットワーク外からもアクセスができるようになっていた．

2000年10月のアデレード大学におけるニュースでは、CAULによるコンソーシアムによってISI社「Web of Science」を導入している．これは非常に高額であるが、引用論文を遡りながら、調べようとするテーマに関する論文を網羅的に調査することができる研究者にとって非常に有用なデータベースである．データベースや電子ジャーナルの導入にあたっては、利用に快適さと安定性がないと折角の電子情報も有効利用ができない．電子情報に快適性と安定性を求めるため、岡山大学附属図書館の購入データベースの構成もWeb対応やインターネット型のものを中心に切り替えていくことが肝要だと思う．

著　　者

次に紹介するのは、ブリスベン郊外にあるクイーンズランド大学図書館である．大学の規模も大きく、大学の人口は3万人（学生数は2万9千人で20％が大学院生）を超えている．クイーンズランド大学図書館は、1995年より電子図書館化に向けた取り組みを大学のIT化計画にあわせて行っている．

図書館は、これだけ多くの教職員や学生（顧客）に対して、快適な利用環境や顧客サービスを提供するため、インフラ整備だけでなく、ITサービスへの転換を軸とした基本コンセプトを図書館全体で実現した．主な内容を、次に示す．

＊LibraryからCybraryへの転換（Linking People with Information）
＊図書館の建て直し（Dahing Building, Fryer Library, etc）
＊教職員、大学院、学生など異なるニーズに応じた情報教育スキルの改革
＊図書館ホームページの徹底したサービスへの活用（6千頁を越えるホームページ）
＊AskIT（ITを利用したレファレンスサービス）
＊電子情報の収集（6千タイトルの電子ジャーナル、250種類のWebデータベース）
＊ホームページによる教育支援情報の提供（Lecture Note, Examination Papers）
＊情報教育の地域支援サービス（UQL Cyberschool）

クイーンズランド大学図書館

クイーンズランド大学図書館のIT化には、大学の全面的なサポートがある．一方で、図書館職員全体がIT化の促進について受け入れ、個々のセクションで真剣に改善を行ってきたことが成功につながっていると思った．岡山大学附属図書館にとっても、IT化への対応は避けられない．時代の急速な変化に図書館サービスがついていくためには、図書館員の資質が問われている時代ではないだろうか．

最後に、今回の海外派遣の機会を与えていただいた国立大学図書館協議会、岡山大学附属図書館の関係各位に、この場をかりてお礼申し上げます．

（ほうじょう・みつとし　附属図書館情報サービス課電子情報係長）

池田家文庫等貴重資料展「備前慶長国絵図のふしぎ」について

情報サービス課

はじめに

平成12年10月23日(月)から11月1日(水)までの10日間、附属図書館5階特殊資料展示室において、恒例になっている展示会を開催した.「備前慶長国絵図のふしぎ」が今年のテーマである.

江戸幕府は、全国統治をしていることのあかしとして、各地の大名に国ごとの地図（国絵図）と土地台帳（郷帳）の提出をたびたび命じた. その最初は、徳川家康によって幕府が開かれた直後の慶長10年（1605）頃であったといわれている. この頃の絵図については、不明な点が多い. 当館が所蔵する、この展示資料のメインである「備前国図」もそのうちの一つであり、そのふしぎな点を六つ挙げた.

入場者数710名、その方々から多くのご意見等も寄せられた. ここにそれらも含め、まとめて報告する.

展示品一覧

1. 備前国図
   慶長期
2. 慶長九年御検地帳写
   慶長9年（1604）
3. 備前国九郡之帳
   備中十一郡帳
4. 領知判物写
   寛永11年（1634）
5. 領知目録写
   寛文4年（1664）
6. 備陽記
   享保6年（1721）
7. 備前国九郡古図［複製］
8. 岡山城下切絵図（東　小橋以東）
9. 海瀬舟行（上）
10. 児島郡図
    万治4年（1661）
11. 和気絹（白鶴堂叢書六）
12. 児島郡御朱印高改出シ年々開田畑万引高差引帳　貞享元年（1684）
13. 上道郡新田図
14. 上道郡沖新田図
15. 邑久郡新田図
16. 池田家履歴略記　三
17. 撮要録　巻25
18. 下津井海岸見取絵図
19. 八塔寺之図
    八塔寺近村大略図
    八塔寺御備所之事
20. パネル　岡山古図

講演会

10月28日(土)午後2時から4時までの2時間、「江戸幕府の国絵図事業」と題する講演会が、新館5階大会議室で開かれた. 講師は川村博忠東亜大学教授（山口大学名誉教授）. OHPを使ったわかりやすい講演であった. 入場者数65名、絵図に興味のある方々が多数集まり、熱心な質疑応答も行われた.

来場者統計

① 年　齢

24歳以下　37%，　25～34歳　10%，　35～44歳　8 %

45～54歳　12%，　55～64歳　15%，　65歳以上　18%

② 性　別

男性　58%，　女性　42%

③ 所　属

学内学生　20%，　学内教職員　12%

学外学生　19%，　学外教員　2 %，　学外その他　47%

④ 住　所

市内　55%，　市外（県内）　21%，　その他　24%

⑤ 来場の情報源（重複回答）

新聞　40%，　ポスター　28%，　雑誌　0.4%，　その他　32%

その他内訳（先生から，TVのニュースで，人から，ラジオ，図書館で，等）

⑥ 来場理由（重複回答）

内容に興味　65%，　近いから　15%，　時間に余裕　11%

図書館に興味　4 %，　その他　5 %　その他内訳（授業で，卒論のため）

⑦ 展示点数

多い　4%，　適当　77%，　少ない　19%

⑧ 解説内容

難しい　13%，　普通　70%，　易しい　17%

⑨ その他意見等

・丁寧な説明があったので、よく理解できた.　34件
・次回を楽しみにしています.　32件
・貴重な資料ありがとうございました.　18件
・史料の文字が読みづらい、拡大の工夫があればよい.　12件
・パンフレットがカラーになり、わかりやすくなった.　9 件
・変体仮名がよく分からないので、理解し難い.　9 件
・大いに勉強になりました.　8 件
・展示品の位置が、全体的に高いのでは.　6 件

以下省略

終わりに

今年の展示会は、よく雨が降った．それにも関わらず昨年並みの710名の方々にご来場いただいた.「ふしぎ」というキーワード、パンフレットのカラー化等については、まだよく分析できていない．しかし、新聞の一面カラー記事、TVニュースでの宣伝等、マスコミの威力は、十二分に肌で感じた.

講演会も椅子がほとんど埋まった．ご意見等もたくさんいただいた．次回の計画の参考にします．ありがとうございました.

電子ジャーナル
―契約面からのアプローチ―

雑　誌　係

冊子体の雑誌購入手続きは、次のような手続きを経ています.

① 教官に次年度分購入雑誌の意向調査
② 調査に基づき事務手続き後、業者選定＝購入雑誌の予約
③ 雑誌の納入－受入 ┬ 配架・学部送付
　　└ 支払

近年、冊子体の購読に電子ジャーナルの利用が付加されることが多くなっています. 一方では冊子体が付録的に扱われ、冊子体のみの購入が不可能なものもでています. 冊子体の到着を待つ間のタイムラグ、図書館に足を運んで現物を探す手間を省き、短期間に多くの利用者が閲覧できることを考えると、電子ジャーナルでの利用が増えていくものと思われます.

海外の出版社では、「SD21」（エルゼビア社提供）のように冊子体の購入金額が基準額を越えていれば、非購読雑誌も含めた電子ジャーナルの閲覧が可能となるサービスを行っているところがあります. 本学では2000年度にこのサービスを利用していましたが、2001年度は基準額に満たないため、購読誌のみの利用となりました. この基準額を一大学でクリアするのは、厳しいものと思われます. 今後は近隣大学との共同利用の方向も考えられるでしょう.

冊子体を伴わない電子ジャーナルもあります. この購入の手続きは冊子体と同じですが、③の手順が変わってきます. と同時に様々な問題が生じてきます. 冊子体という形あるものを伴わないので、納入－受入の確認が難しい. 電子ジャーナルの閲覧ができるかどうか常時確認しなければならない. 利用できない時の処理はどうするのか. 返金となるのか. 代替え策があるのか. 閲覧は契約期間のみなので、契約期間終了後はバックナンバーの閲覧はできなくなる（一部バックナンバーを保証しようとする動きもあり）等々です.

出版形態の変化に伴い、従来の手続き方法も変えていかなければなりません. 大学図書館として状況を鑑み、適切な対応を検討していきたいと考えています.

マスカット

図書館ボランティアその後

平成10年10月1日より、中央館では図書館ボランティアを導入しています．活動も3年目に入り、軌道に乗り、現在男性3名・女性5名の方々に図書・雑誌の配架、相互利用サービスの援助等に協力いただき、日常業務の貴重な戦力となっています．

図書館ボランティアとの意見交換会及び懇親会

平成11年度は都合により開催できませんでしたが、平成12年度は12月26日(火)16:00から、ボランティアの方々、館長を始め、部課長、関係係長等が出席して意見交換会が開催されました．ボランティア各位より、建設的な意見が多数出されました．

続いて、17:00過ぎから懇親会が開催されました．

遡及入力報告（平成11年度、平成12年度）

平成11年度は平成11年10月～平成12年3月までで、72,000余冊を入力（平成10年度は60,000冊弱）し、平成12年度は、50,000余冊を入力する予定です．

平成12年度末には、未入力図書は、714,000余冊となるものの、入力完了までには、あと10年余を必要とします．教官から「早期の入力の完了を」との強い要望に鑑みて、あと5年間での完了を目指して、新計画の策定に取りかかっています．

池田家文庫絵図類の補修

平成7年度の調査で、池田家文庫にある約3,000点の絵図類のうち、相当数について何らかの補修が必要であることがわかりました．幸いに文部科学省や学内の理解を得られて予算化され、平成8年度から平成11年度までに約200点の補修が終わっています．このことにより、絵図データベース化に際してもより良い状態で記録することができました．継ぎ目がはがればらばらであったものが巨大な1枚の絵図に蘇るなど、展示会で公開できたものもあります．この事業は平成12年度も継続されています．今年度は約50点が補修できる予定です．

図書館講演会

図書館職員研修の一環として講演会が開催されました．それぞれに時期を得たテーマで、会場となった図書館大会議室に参集した職員等は熱心に耳を傾けていました．

1　日　時　平成13年1月26日(金)14時から16時
　　講　師　大埜浩一氏（東京工業大学附属図書館事務部長）
　　演　題　東京工業大学附属図書館における電子図書館化について
2　日　時　平成13年2月2日(金)14時から16時
　　講　師　濱田幸夫氏（文部科学省学術機関課大学図書館係長）
　　演　題　文部科学省における大学図書館行政について

利用者パソコンの更新

図書館にある総合情報処理センター系の利用者パソコンが更新されました．スマートな液晶ディスプレイに変わり、利用方法はシンプルになっています．インターネット専用の機能を生かし、図書館蔵書検索や文献調査、学内外の情報収集、また就職活動にご活用ください．

二次情報データベースガイダンスの報告

平成12年度のガイダンスを下記の日程で行い、計57名の参加がありました．

前期コース　6、7月の第1週

後期コース　10月の第3週と11月の第1週

大型プロジェクターを使った検索方法のデモンストレーションを中心に質疑応答や利用相談なども行いました．

オリエンテーション（平成13年度）

図書館では例年4月ごろ、蔵書検索（OPAC）を中心として基本的な利用ができるためのオリエンテーションを行っています．

ここ数年、中央館では個人参加のオリエンテーションに加え、ガイダンス科目に組み込まれるなど、授業・ゼミ単位の申し込みが増加しています．この傾向に対応して、LIBRARY REFRESHで平成13年度のオリエンテーション実施計画を公表し、既に受付を開始しました．また、図書館オリエンテーションを教官自身でされる場合は、必要に応じて資料作成に協力もしています．お気軽にご相談ください．

鹿田分館、資源生物科学研究所分館においても、同様のオリエンテーションを実施しています．

詳細は下記にお問合せください．

＜中央館＞

○参考調査係（一般）

津島地区　内線：7323　e-mail: fbg7322@adm.okayama-u.ac.jp

○電子情報係（データベース関係）

津島地区　内線：7312　e-mail: fah7312@adm.okayama-u.ac.jp

＜鹿田分館＞

○情報サービス係（全般）

鹿田地区　内線：7053　e-mail: fcg7053@adm.okayama-u.ac.jp

＜資生研分館＞

○情報サービス係（全般）

倉敷地区　内線：1204　e-mail: fde1204@adm.okayama-u.ac.jp

一般教育科目授業への協力その後

平成10年度後期から開催した一般教育科目授業への協力も3年目に入りました．経験を積むにつれ、様々な問題点も指摘され始めているので、近く本格的に協議し、より効果的な授業にしていこうとの機運が盛り上がってきています．

教官からの著書寄贈リスト（平成12年7月～平成12年12月）

次の方々から著書を寄贈いただきました．ありがとうございました．今後とも、ご理解とご協力をお願いします．

＜中央館＞

神立春樹［名］

明治期の庶民生活の諸相――御茶の水書房，1999　(365/K)

明治文学における明治の時代性（岡山大学経済学研究叢書第24冊）――御茶の水書房，1999　(910.261/K)

近代蘭莚業の展開（岡山近代史研究叢書第2輯）――御茶の水書房，2000　(583.9/K)

鷹取晟二［名］

おお岡大われらのもの：鷹取晟二先生御退官記念誌――岡山大学教育学部理科学教室同窓会，1990　(479.71/O)

田中共子［文］

日本語の習得と文化理解：(財)国際文化フォーラム委託研究報告書（分担執筆）――異文化間教育学会，1997　(F810.7/N)

物質的自己の構造と機能に関する社会心理学的研究（研究分担者）――藤原武弘，1997　(F361.4/B)

異文化間カウンセリングにおける非言語的技法に関する実験臨床心理学的研究（研究分担者）――井上孝代，1996　(F146/I)

辻星児（編）［文］

小田眞弘著作集――岡山大学文学部言語学研究室，2000. 3　(804/O)

名合宏之（研究分担者），大久保賢治（研究分担者）［環理工］

歴史的河川構造物の水利機能と地域社会および河川生態系との係りに関する研究：吉井川吉井堰に関する事例研究：研究成果報告書――京都大学防災研究所，2000　(LF517.2/R)

早津彦哉（共編・分担執筆）［名］，根岸友惠（分担執筆）［薬］

食品衛生学――南江堂，1992　(498.54/S)

行安茂［名］

生命倫理の問題と人間の生き方――北樹出版，2000　(490.15/Y)

(敬称略五十音順)

会議

◆学外

12.10.12～10.13
平成12年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議（於　広島大学附属図書館）
・電子資料購入について、その他

10.25～10.27
第41回中国四国地区大学図書館研究集会（於　徳島東急イン）
・電子化される資料とサービスの再構築、その他

11.13～11.14
2000年京都電子図書館国際会議（於　京都大学）
・電子図書館について

11.29　平成12年度第3回国立大学図書館協議会理事会（於　京大会館）
・総会の運営について、その他

12. 4～12. 5
平成12年度中国四国地区国立大学附属図書館事務（部・課）長会議（於　岡山大学附属図書館）
・地区における電子ジャーナル等のコンソーシアム形成による導入について、その他

12. 7～12. 8
第13回国立大学図書館協議会シンポジウム（於　名古屋大学附属図書館）
・オンラインジャーナルの導入と外国雑誌収集のあり方、その他

13. 1.25～1.26
平成12年度国立大学附属図書館事務部長会議（於　徳島大学）
・大学図書館運営組織の在り方について、その他

◆学内

12.10. 5　鹿田分館分館長、副分館長会議
10.26　平成12年度第2回図書館運営委員会
11. 7　大学院特別図書選定小委員会
11.20　平成12年度第1回図書館将来構想検討小委員会
12.12　平成12年度第1回電子図書館研究開発会議
12.20　平成12年度第3回鹿田分館運営委員会

研修

・目録システム入力業務担当者説明会（12.10.11）
参加者　大元利彦
・平成12年度中国四国地区国立学校等会計事務研修会（10.23～10.27）
参加者　亀川勝典
・平成12年度大学図書館職員講習会（11.6～11.9）
参加者　嵯峨奈美子
・平成12年度新CAT/ILLシステム説明会（11.27）
参加者　遠矢厚志
・平成12年度中国四国地区国立学校等係長研修会（11.27～11.30）
参加者　川上研三
・平成12年度総合目録データベース実務者研修（システム担当者コース）（13.1.22～2.2）
参加者　大元利彦

編集委員会から

図書館の利用方法が変化してきています．検索方法も多様化しています．利用する媒体も紙以外のものが増えました．資料や利用環境の整備がよりよいサービスの提供につながるものと思います．整備途中で利用しづらいこともあるかもしれません．そんな時はカウンターに聞いて下さい．1月に利用者用端末が入れ替えになりました．オリエンテーション等を利用して図書館を十分活用して下さい．

岡山大学附属図書館報「楷」　No. 32　平成13年2月28日
発行人　石田常亞　編集　広報委員会　表紙デザイン・レイアウト　清水國夫
岡山大学附属図書館発行　〒700-8530　岡山市津島中三丁目1-1　電話086-252-1111
URL　http://www.lib.okayama-u.ac.jp/